

TOHOKU MICHINOUKU

福崎君の
若葉の蔭から
番外・東北編

福崎 かずたろう

はじめに：16ページ有ります。適当に分けて読まれた方が賢明かと・・・

☆ どたばたスタート

今年の10月、東北へ旅行に行く事にした。しかし、愛車エス君は入院中である。連休前までに治る（擬人法）か治らないか、微妙なところであった。結果として、部品が届かないとかで連休までに治るのは不可能との連絡を受けた。私は仕方なく近所の交通公社でレンタカーの手配をした。これが出発の5日前。で、出発2日前、エス君の入院先の工場へいってみると、なんと、何にも直していないのである。事故当時のままで放置されていた。『これから連休に入ったら作業は出来まい、ということは連休中エス君を預けていることもない！』と、考えた私は急遽、汽車&レンタカー案を取りやめ、エス君のけがをおしての登板を強行することにしたのである。急ぎブルペンで投球練習をしていたレンタカーをキャンセルし（キャンセル料として3割もとられてしまった！）、マイカー用の荷造りを始めた。

マイカー旅行のよい点は、宿がいらんということである。その昔「かずろう」とかいう男がマイカー旅行で毛布を忘れてどうのこうのと書いていたので、私はしっかりと毛布と布団を積み込んでおいた。10月とはいえ、東北は寒かろうと判断したのだ。こんなもん、レンタカー旅行では持って行けないものである。他にもいらんものもどんどん積み込んだ。夜など暇だろうと考えて、文庫本3冊と現地で原稿でも打つべえとワープロまで積み込んだ。が、いずれも

そんな余裕はなくて無駄になったが。

10月7日、仕事から帰ってきて、風呂入って飯食って、夜7時スタート！
(新番組の宣伝みたいやね)

☆ 北陸道・遠い新潟

吹田インターから名神に入り、米原ジャンクションから北陸道へ入った。

街中のごみごみした所をあくせくと走ったり止まったりするのは、たいへんストレスが溜って嫌なものだが、夜の高速はもっと嫌になった。退屈なのである。景色は見えない、ハンドルもミッションもウインカーも何も触らない、ただアクセルを踏み続けるだけである。退屈だけなら良いのだが、それは眠気を催す。時速100キロで居眠りは、生命の危機に直結する。

高速道路では、何キロかおきに大きな目的地までの残り距離が表示される。「福井まで100km」の表示のあと、50kmも走ると「金沢まで100km」、また50km走ると「富山まで100km」・・・簡単に「50kmも走ると」と書いているけど、大して変化のない高速道路を30分は走らないといけない。しかも夜間である。しんどい。だからこういった距離表示は実に励みになる。金沢を過ぎたあたりで「富山まで50km」を見たときには、「おお、もう少しで富山県やんけ、これやったら新潟もすぐだあ」などと喜んでしまったものだが、そのあとで世にも恐ろしい標識を見てしまったのである。

「新潟まで280km」！！いきなりであった。いままで走ってきた距離分くらい走らないと新潟まで行けないのである。「あうう～」私はうなった。

☆ オヤシラズ海上道路は夢の中

北陸自動車道が今年全通した。それまで富山県と新潟県の境で、昔から難所として知られていた「親不知海岸」^{おやしらす}部分が未開通だったのである。その昔、ここを通る旅人はあまりの断崖のために、自分の保身で手いっぱい親も子も相手を思えないということからこの名が付いたとも言われている、ほどの所である。フォッサマグナの通る場所であり、数メートル進むごとに地質が変わるなど、現代工学を持ってしてもやはり難所であったらしい。北陸道は、なんと道路を海洋上へ張り出させて解決している。

といったぜひとも「海の上の高速道路」というものを自らの運転で通ってみたかったのだが、いかんせん夜中であった。ここらへんかいなあという曖昧な実感しかなかった。

それよりも、恐かったのは、どういうわけかこの新規開通部分は、トンネル

が片側分しか無いのである。つまり、トンネル内部では、一般道路と同じ様に
対面通行になるのである。制限速度は50キロに落ちるが、それを守るドライ
バーは当然いない。時速100km同士のすれ違いである。そのうち慣れてくる
となんとも思わなくなる。それどころか少し居眠り状態で走っていて、はっと
気づくとセンターラインに寄っていたりする。偶然対向車が出て、その車のド
ライバーも同じ様な状態だったとしたら・・・。夜の北陸道トンネル内正面衝
突事故発生・二次衝突玉突合戦火災発生死者十余名！これは恐い！

10 / 8 (土) — 北陸道から田沢湖まで —

☆ 名立谷浜SA

昨夜は1時頃、朦朧とした意識の中、新潟県「名立谷浜SA（サービスエリア）」
に到着。布団を取り出して寝る。

目が覚めると6時だった。もぞもぞと起き出してSAの洗面所で顔を洗った。
高速道路の洗面所はたいへん清潔でありがたい。SAの展望台に登ると、やわ
らかい朝日を受ける日本海が近くに見える。ようやく『非日常的土曜の朝的気
分』に浸る。普段は、まだ、寝ているな・・・。

6時25分、新潟県の西の端をスタート。朝日をあびて走る。

7時40分、黒崎PA（パークウェイ）に到着。乾パンとジュースで朝食。

8時05分、黒崎IC（インターチェンジ）で北陸道完走。国道49号に入る。

さて、ここからは、地理に弱い方は、日本地図を座右に読み進み下さったほ
うがよろしいかと・・・。

☆ イチオウ国道・400号

まず、会津へいくことにした。新潟から東へ2時間、49号から分かれ40
0号へと入った。しばらく走ると、道幅がだんだんと狭くなり、いつの間にや
ら舗装まで無くなってしまった。『これはひどい、酷道だあ』などと考えてい
るとさらに狭くなって1車線になって、ついに農道レベルになってしまった。

実際、こういった「酷道」は全国に数多くあるだろう。要所要所を結んでい
るので「いちおう国道指定にしておこうか」といった感じである。ま、それで
も「イチオウ国道」なので、国家予算から工事費が毎年いくらかずつは出てい
るらしく、ところどころで立派な国道に成るべく工事はしていたが。おそらく
20年後に通っても完成はしていまい。

会津只見川の川沿いに出た。4年前と3年前の同じ季節の頃、鉄道写真を取りに車でやって来た宮下の街である。あのときは駅からリュックサックを背負い1時間余りも歩いて、ようやく鉄橋を俯瞰するポイントまでやって来たんだったなあと考えているうちに、今の私は車でそのポイントをあっさりと通過してしまった。

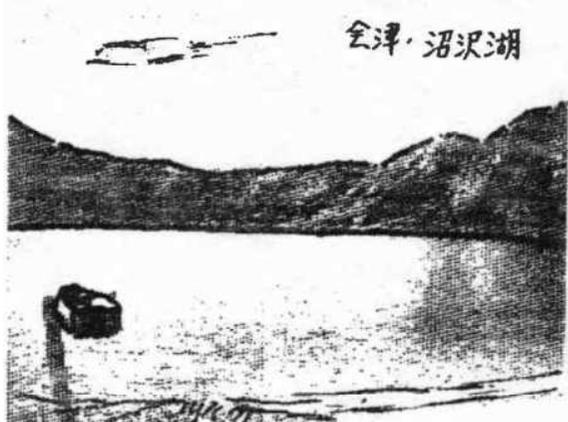
☆ 初の目的地・沼沢湖

只見川は、ダムの影響で細長い湖であるかのように穏やかである。地形図を見ると只見川の両端は、以前は急流が谷を刻んだ事がうかがえるように切り立った崖になっている。そんな直線的な地形の中で唯一、お椀を伏せたような地形があり、その真ん中に沼沢湖がある。火山の噴火口がへこんで、そこに水がたまったカルデラ湖である。

日本地図を見てもらうとわかるが、湖の多くは東日本に集中して分布する。これは東からやってくる太平洋プレートが日本の下へもぐり込み、その摩擦熱でマグマの元が生じているからと考えられている。よって東北は火山が多く、結果としてカルデラ湖をはじめとする多くの湖が存在することになる。

今回の旅行の目的の一つに、湖の撮影がある。できれば紅葉と組み合わせたいと思っていた。さっそくその第一段、と気負ってやって来たのだが、紅葉には、まだ早かった。今年は冷え込むのが早かったので、10月上旬でも、あるいは紅葉しているのではないかと期待していたのだが、ここはまだのようだ。

それでも、カルデラ湖らしい・急崖に囲まれた山上の湖、といった感じは良い。オフシーズンということで訪れる人もなく、湖岸の喫茶店は閉店中、ただただ朽ちたボートが一隻、風に吹かれて湖岸を漂ふ。ああ、山のあなたの空遠く……。



☆ 磐梯山・磐梯高原

只見川に沿う252号線を通り会津若松へ向かう。そして磐梯山に登るべく磐梯山ゴールドライン（700円）を通る。磐梯山に南側から登るルートとしてはこの他にも県道が2本あり、何も700円もだしてゴールドラインを通る

必要もなかったのだが、一本は去年の夏にバスで通ったことがあり、もう一本はこの旅行の最後に通る予定であったので、パスした。

「磐梯山を正面に眼下には猪苗代湖が全容を表わす展望ルート」であるが、天気が霞み晴れで、いまいち感動の無いまま、磐梯高原に着いてしまう。磐梯山は会津富士と呼ばれていたほど美しい成層火山だったそうだが、明治の大爆発で、山体の3分の1が吹き飛び、流れだした溶岩が川を堰止め、桧原湖をはじめとする高原湖を作ったそうである。とにかく高度1000メートルの山中に大小様々の湖沼が存在しているのは、その成因からして少し不気味である。天気がだんだんと悪くなってきたので、ろくに写真も撮らず、西吾妻スカイパレー（900円）で、米沢に向かう。天元台・白布峠などみどころもあったが、小雨が降り出す始末で何も撮れない。

米沢は伊達政宗の故郷だったかな？ 昨年来たときに「米沢牛の牛鍋定食」を食べたのを思い出した。たしか1500円。駅前の「松井」という店です。あんまり美味しくなかったですよ。旅行メモに『わけのわからん米沢牛を食わされる』とあるから。全然関係ない話だけど、松坂牛も食べました。松坂の駅前で。今年の2月。但馬牛も食べました。今年の7月。俺ってグルメだなあ。

☆ 夜の田沢湖

さて、そんな思い出にふけている間にどんどん天気は悪くなってきて、どんどん暗くなってきました。まだ4時過ぎなのに。で、仕方が無いから撮影はあきらめて、北を目指します。今夜は田沢湖まで、あと250km。

国道13号ひた走りに走って7時間。大曲から105号に入って武家屋敷で有名な町・角館。真っ暗で何も見えないけど。そして角館からの坂道（たぬきの飛び出し有り）をのぼって22時30分、ようやく田沢湖に着いた。

田沢湖は冬期でも凍結しないそうである。これは田沢湖の辰子姫（こいつは自分の美しさが永遠なれと願うあまり竜にされたというバカ）を、八郎瀧の八郎なんとかという竜神が、冬になると訪れ、アツアツになるからだという浮いた伝説がある。そのせいか、田沢湖といえば、真っ青な青空・まっ金キンに塗られた辰子姫の像・その下でニタニタしながら記念写真を撮る馬鹿ギャル観光客、と相場が決まっている。

しかし、夜である。あまりにも真っ暗な空間が眼前に広がっていることから、そこに街灯の類の光る余地のない、水面があることが認識される程度である。青空もまっ金キンもギャルもそこには無かった。あるのは闇と山上のカルデラ

湖をなめる秋の冷風と大阪男ひとり車一台である。

田沢湖の周りの道路は有料道路になっていて、1周すると600円を取られる仕組みになっている。しかし、深夜の料金所に人はいない。なぜか大変得をするような気分になって時計周りに走りだしてしまった。しかし、面白くない。すぐそこに湖が広がっているはずではあるが、何も見えない。道路にしたって、何となあく右へ右へと曲がっているような、大局的には円運動をしているんだらうけど、「一周」という感じがしない。そんなこんなで大して面白くもないドライブ（だから無料なんやね）を30分ぐらいして、ようやく元の位置へ戻った。近くの駐車場に車を留めて、寝る。

10月9日（日）

☆ 秋田男鹿半島はさわやか半島

天候くもり。透明度日本第2位の田沢湖も曇ってれば、ただ灰色の水塊としか写らない。何のためにきたのか分からないが、ろくに写真も撮らず、秋田・男鹿半島へ向かった。男鹿は今年の夏に旅行研究会のメンバー3人で、昼からレンタカーを借りて回ったことがあるのだ。その時は今ほど地学的興味が無かったので、撮らなかった写真もあったのだが、今になって思うと、教材に使えるような地形もあるので、再訪となったのだ。

男鹿半島に近づくとつれ天気が快復し、快晴となった。八郎潟の調整池と日本海を結ぶ水道を越えると、目の前に半円状の寒風山が見えてくる。

寒風山は全山芝生で被われた火山性のなだらかな小山で、360度の展望がひらける。芝生はそのまま公園となり、「ボール遊び禁止」なんてケチな看板は一切ない。それどころか、土産店が、 frisbee やら サッカーボール やらの遊具を無料で貸してくれるのだ。何という気前の良さであろうか。快晴のもと、きれいな芝生の上で跳ね回って遊んだら、さぞかし気分のいいことであろう。でもそうになったら、財布の紐もゆるむだろうなあ。

寒風山で噴火口の写真を撮り、カルデラを巻くように走って、次なるポイント・八望台へと向かった。

八望台から見えるのは、一の目潟・二の目潟、そして戸賀湾である。これら、円形の湖ないし湾は、ごく弱い火山活動で出来た円形のくぼみ（マール）に水のたまったマール湖で、日本には数カ所しかないものである。昨年訪れたときは日没前だったので、よく形が分からなかったが、今回は丸い形の二の目潟の向こうに、これまた丸い戸賀湾がよく分かる。写真に収めて、満足して男鹿半

島を後にする。

☆ 十二湖で想う

日本で2番目に広がった八郎潟を埋め立てて作った（八郎某という竜神はどうしているだろうか）大潟村、「米輸入大反対」の村内を突き切って国道7号へ出る。

能代の街を過ぎると左手に日本海が見え、右手に崖が迫って来ると、急激にひとけがなくなったように感じる。というのは、日本海の風にさらされるからであろうか、背の低い灌木しか生えていない「遊んでいる」草地在視界の大部分を占めるようになるからだ。

男鹿から2時間半で、目的地「十二湖」に着く。原生林の中に30あまりの沼が点在するといわれ、以前から訪れてみたい所ではあった。日曜日ということで、青森や秋田のナンバーの自家用車が結構集まってきており、『ひそやかな湖沼群をゆったりと眺める』という目論みは外れたが、車が留められないというほどの混雑ぶりでもなく、安心した。

天気はいつのまにか、ぐずついていた。

立ち枯れた木が頭を少し水面に出している滝壺沼は、どこからが水面になっているのか判らないほど、澄んでいた。沼というにはあまりに澄んでいた。

ふと、渡辺淳一氏の「阿寒に果つ」の主人公の少女を思い出した。天才画家と呼ばれたナルシストの少女が、冬の阿寒湖を見おろす場所を自分の死に場所を選び、実行する。残された男たちが回想して彼女の多面的な人となりを描くという形の話なのだが、阿寒よりも、なお、この沼の水の方がふさわしいような、そんな澄んだ水だった。こういう場所なら絵になっていいな、と思ったりした。入水自殺など、膨れ上がった死体に藻が付いたり魚についばまれたりして、とてもじゃないけど、やりたいとも見たいとも思えないような死に方に思えるけど、この水ならガラスの中に埋め込まれた・水中花のように永遠に密やかに存在しそうな、そんな気をおこさせる水であった。

青沼は以前に旅行研究会のアルバムでみた通りの「真っ青」な水をたたえていた。「青沼」なんて名前は、どこの湖沼群にもあるものだが、ここの「あお」は正真正銘の「あお」であった。いや曇天のせいかむらさきに近いとさえ思われた。波長でいうと0.4μmくらい。以前から、なぜ水に色が付くのだろうかと考えていた。周りの色の反射や入射した光のうち特定波長のものだけが反射・散乱してかえって来るのだらうと、一応は理解はしているのだが・

・。水中にとけ込んだ物質によって返ってくる波長域が異なるためせいもあるうし、深さによるものも・・・。

しかしそんなことは知らない方が、美しいものは美しいとダイレクトに感じられるようでもある。

☆ 岩木山 8 合目

岩木山の麓に到着したのが、4時だった。看板のある三叉路を曲がりドライブウエーに入る。ほどなくゲートがあり、通行料1700円を取られた。「高い！」と憤ったが、ここまで来て登らないのも癪なので払った。以前の私なら近寄りもしなかったろう。リッチになったもんだ。この道路は岩木山8合目まで69のカーブをもって一気に駆け上がってしまうという豪快なものである。パイ生地の断面図のようなヘアピンカーブの連続で、どんどんどん高度を稼いでいく。ちょっと乗り物に弱い人ならひとたまりもなく酔ってしまうような道である。カーブを曲がるにしたがって、落葉樹の色が薄黄・黄・オレンジ・ヴァーミリオン・赤・紅と微分的に素知らぬうちに自分勝手に変化していく。そして落葉樹の色が物語っているように、気温も微分的に下がっているのである。8合目についたのが4時30分であった。セーターの上にウィンドブレーカーを着たぐらいじゃ寒い。急いで荷物の中からインスタントカイロを取り出して、振った。

8合目から上へ上がるロープウエーは、「強風のため運行中止」と大書きされてあった。つまりそこから上へは上がれないようだ。頂上にある噴火口も見なかったが、何と言っても、青森秋田では山自身が信仰の対象とされている岩木山の、岩木山神社というものが見たかった。なんでも『奥の日光』と呼ばれており「杉木立の中に華麗な社殿を並べている」らしい。しかしまあ、上がれないものは仕方が無いので、次の機会に譲るとして（私は若いのだ！）、展望台から落陽を見ることにした。展望台だけあって風通しがよく、オーバーでも持ってくれば良かったというような寒さであった。じっと待つこと40分、太陽は雲と山ぎわの境のわずかにあった隙間から、弱々しい赤い姿を見せ、大してこちらを照らすということもなく、沈んでいった。冬を感じさせるような寂しげな落陽であった。

☆ 青森宿捜し

一昨日の晩から、丸2日で1500kmを走った。いい加減疲れている。睡眠

も充分とは言えない。ということで、ここらで宿に泊まることにした。次の日の予定の事も考えて、青森まで走った。青森はいままで10泊以上も泊まったことのある街だ。といっても、すべて青森駅の待合室でだが。今日はさすがに、風呂のある普通の宿に泊まろうとしたが、車でうろうろと宿を捜すというのは、実に、ただれたアベック的で、我ながらかっこうが悪い。そして、悪いことに連休中ということで、どこのビジネスホテルも満室である。1時間余りも青森の街を車でぐるぐる徘徊してしまったのち、やっと、駅のそばに『第一旅館』なる古くさい商人宿を発見。素泊まり3200円で泊まる。

一風呂浴びて、家に連絡をいれる。電話が無いような旅館なので、外にでて公衆電話から掛ける。ここで、初めて電話ボックスの中に近くビジネスホテルなどの電話番号が書いてあることに気づく。そおか、宿に直接向かうより電話ボックスを捜す方が手っとり早かったのだ。ごめんなさいね、世間知らずで。自慢じゃないけど、一人で宿に泊まるのなんて3回目なんだもん。

10月10日（月）

☆ 八甲田の朝

「体育の日は晴れるの法則」の通り、晴れである。6時20分には宿を出た。萱野高原では、朝もやの中、紅葉した木々が、差し始めた朝日を受けて長い影を草原の中に落としていた。

高度をあげて行くにしたがって落葉樹の色彩が華やかさを増し、峠付近の紅葉はピークで、明日にも色あせが始まりそうな緊迫的な美しさである。八甲田山を取り巻くようにして点在する地獄沼・睡蓮沼・鶯の七沼などの沼群もそれぞれ水面に紅葉を配し、美しい。気分をよくして八幡平へと向かう。



☆ 馬っ鹿やろお奥入瀬・十和田やっぱり嫌いだ

だいたい私は大きな湖というのは、嫌いな傾向がある。風景として大ざっぱになりやすいのと、大きな湖の周りは、どうしても旅館が立ち並びバスターミナルができ人が集まって遊覧船などが出てしまい、湖畔は湖畔でとうもろこし

売りが出ておみやげ屋がどこでも売っているような子供向けの玩具をはずかしげもなく並べ、そしてそれを見てとおる観光客は一様にニタニタしているからである。北海道なら阿寒湖、東北ならやはり十和田湖であろう。6年前に家族旅行で来たとき既にいい加減、辟易した思い出がある。しかし、通らなくてはいけない、出来ることなら通りたくはないのだが、通らないことには八幡平へ行けないのだ。

奥入瀬へ入ると、案の定渋滞が始まった。観光バスなどが奥入瀬川へと落ちる岩滝の前などで徐行するためである。

銚子大滝に立ち寄った。有名なだけはある、存在感のある滝だが、これとて足の踏み場のないほどの人が集まるものでもないような気がする。人々はきりたんぼ（秋田名産の餅）を食べつつ、滝の前でハイチーズをやっているのだ。これはたまらん、早々に立ち去る。

湖の周りの五色台や発荷峠からの茫洋とした十和田湖の眺めも、天気が悪くなってきたことと相まって、ちっとも美しくない。「きゃああ、きつれえい」などとほざいている馬鹿女に『どこがやねん』とあやを付けたくもなる。これも、さっさと立ち去るに限る。

☆ 大沼の色

八幡平アスピーテライン（秋田側800円）に入る。ちなみにアスピーテとは盾状火山のことで、八幡平の東側がそういった火山になっていることから取っているのだろう。秋田側800円というのは八幡平の西と東・秋田側と岩手側の両方に料金所があり、それぞれで通行料を徴収するからである。岩手側は400円だから安くあげようと思えば、岩手側から出入りすれば良いのだ。

関係ないほうに話が逸れてしまった。で、八幡平に入って、最初の目的地、大沼に着く。天気は良くなっている。そして、ブナの紅葉は真っ盛りである。この季節に北から南へと、あるいは低地から高地へと、移動する間、どこかでは必ず、最盛期の紅葉が見られるはずだと考えていたが、ここがまさにそうであった。絵にも書けない美しさなのだ。だから当然文章で言い表すことは不可能なのである。ということで・・・おいおい。

とにかく全ての色が他の色より目立とうとしてアピールしているかのようである。大沼の周りの遊歩道を撮影して歩いたが、フィルムが色に喰われて、どんどん消費されてしまった。

寒くなると葉の中から茎への物質移動が難しくなり、その結果糖分が葉に溜

って、アントシアン系の赤い色素が形成されるという。落葉樹はやがて訪れる冬を前にして、その華やかな赤系の色素でもって、実に刹那的なアピールをしているのであるなあ。

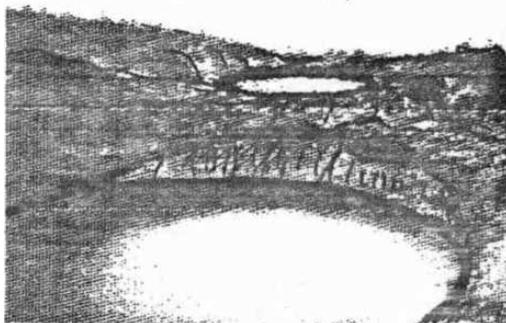
☆ 八幡平頂上

大沼から頂上へと向かう。降りてくる対向車の何台かが、ライトを灯けている。それもそのはず高度を上げ頂上に近づくと、全くの霧！何も見えない。恐る恐る前進して、辛うじて頂上駐車場に着く。写真の撮りようもないので、暖房の利いているレストハウスで昼飯を食う。考えてみると、この旅行中唯一のまともな昼食であった。メモを見ると、8日は弁当、9日は乾パン、11日は菓子パンとなっている。朝も似たようなものである。日のあるうちは、ろくなもん食って無かったんだなあ。で、700円の高地価格牛丼を食べ終わっても、天候は良くならない。車に戻ろうとすると雨が降ってきた。かまわず歩いていると、痛い。雹（ひょう）である。急いで駆け帰った。車に入ると、幌をぶん殴るように降ってきた。しかしここは我慢である。山の天気は変わりやすい。きっとサァッと晴れることだろう。

と、30分も待っていたら、陽は差さないものの雨がやんで、少し暖かくなってきた。待ってましたとばかり、ウィンドブレーカーを着込んで出かける。15分ほどで鏡沼・眼鏡沼（2つ）と、噴火口跡である円い沼が連続して3つ現われる。上から眺めることが出来れば面白いだろう。ほどなく八幡平頂上。しかし、また霧が出てきて、何も見えない。八幡沼もガマ沼も霧の彼方。6年前来たときも、そうだったなあ。

車に戻り、またしても霧の中をセンターラインを逃がさないように、ゆっくりと岩手側へ下山する。しばらくすると霧はぱっと消えたので、おそらく山の上部にだけかかっていた笠雲だったのだろう。

八幡平・眼鏡沼



☆ 十和田福島4号線の旅

西にそびえる岩手山に陽がさしかかっているから、「焼き走り」といわれる、冷え固まった溶岩流の横たわる地形を見に行った。夕焼けでほの明るいなか、溶岩で敷き詰められた台地を見た。溶岩の一つでも持って返ろうかとも考えてい

ると、天然記念物だからあかんと書いた看板を見て諦め、宮沢賢治の詩碑を見て、さあ行きましょかと思っただけもう暗くになっていた。秋はつるべ落としというが、まったく日没から空の照度が下がるまでが早い。

国道4号線をどんどんこどんどこどんどこ走って走って6時間、仙台。半分寝ながら走っていた様な気もする。途中銭湯に寄ったのと飯を食った以外、ノンストップ。さすがに疲れました。しかしめげる事なく、そこから東へ1時間、天童の手前あたりまで走り、山のなかの国道休憩所に車を留めたのでした。星が綺麗でした。たまに通るトラックのライト以外、闇を破るものはなく、夏なら幌をはずして星を見ながら寝てみたいところですが、めちゃ寒い！ ゆっくり星を眺める余裕もなく、早々に車に入り込み、寝ました。青森からの走行距離480km。総走行距離2000km。

10月11日（火）

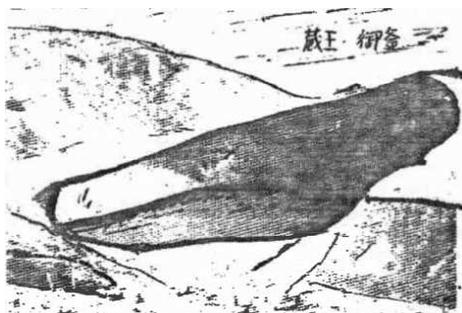
☆ 蔵王でもの思う

世の人は昨日で連休が終わっている。私は、勤め先の学校が文化祭の代休を本日に取るので、まだ休みである。ちなみに明日水曜日はもともと出勤日ではないので休みである。つまり5連休！

さて、スタートは天童市の手前10km地点から。天童・山形と通り蔵王へ。実は蔵王は初めてである。いままで蔵王の最高峰は、有名な御釜（カルデラ湖）のあるところだと思っていたが、違うんですね。そこから西へ登った熊野岳がそうだったんですね。それと、蔵王は御釜よりもスキー場としての知名度が高いため、ホテルとか旅館は御釜より西にあるスキー場の方に建っているんですね、だから御釜のあるところは意外と寂れているんですね。静かでもいいね。蔵王ハイライン（400円）を登って刈田峠（^パ-キング）に到着。駐車場に車数台・焼きとうもろこし売りの車1台という寂しげな状態。しかし私は人が少ない方が嬉しい。さっそく御釜を見に行く。

駐車場から50歩も歩けば、御釜を見おろす丘となる。御釜には直接近づけないが、丘を下って、少しでも近づいてみた。近くでみると、東側の崖が完全に垂直になっていてそこだけ陰になっている。あの崖の上に立ったら、さぞかし尻のすばむ思いをすることだろうと想像した。

静かである。赤茶色の土の広がる中に丸いクレーターのような窪み、その中にたたえられる真みどりの水。現状の地形になるまでに、火山活動がどれだけの時間繰り返されてきた事か。いや、現状の地形とて、まもなく東側の崖は崩れ、そして何百年か後には再び御釜の下からマグマが吹き上がり、湖水を蒸発させ新たな火山を形成するであろう。ああ。人はうつろいゆく地形の単なる一過点に見ているに過ぎないのだ。ああ。嗚呼。などと、私は一人でもの想いにふけていたのだった。ところが、である、後ろからどたばたとジジババオバンの団体さんがやってきて、自分勝手なおしゃべりとオーバーな歓声をもって、私の地球的哲学的大感動を御釜の中に投げ捨ててしまったのである。いそいそと私は蔵王とジジババオバンを後にして、福島へ向かった。



☆ 吾妻小富士・浄土とは

福島から西に進んで、吾妻スカイライン（900円）に入ってわずかで、浄土平。浄土とは、広辞苑では「仏・菩薩の住する国」とある。どういうわけか、東北にはこの浄土平の他に、岩手陸中の「浄土が浜」、青森下北の「仏ヶ浦」と、極楽づいている。いずれも、風景として俗っぽくなく、色彩が白が基調となっている。極楽のイメージカラーはホワイトですか。

浄土平は白っぽい岩石のみがただ広がる不毛の地。そんな平原にプリンをおいたように、吾妻小富士がそびえる。実にきれいな円錐形。駐車場から急坂を歩いて10分ほどで登れる（むきになると結構しんどい）。登りきると平らな部分はわずか10メートルくらいで、すぐに噴火口が、登ってきた高さの3分の2くらい、ずどおんと落ち込んでいる。風がふくと、登ってきた方にも、噴火口の方へも落ちそうになる。

☆ 再訪五色沼は色あせて

再び磐梯高原を訪れる。昨年の夏大感動をした五色沼が目的である。五色沼は、それぞれに色が違う8つばかりの小沼群である。色の違いはとけ込んでいる物質に依るらしい。五色沼の中でも弁天沼や青沼の色は忘れがたいものがあった。

だが、今回はあいにく曇天であった。同じ場所でも、季節によって時間によ

って天候によって大きく変化するものである。特に空を映し出す湖沼はそうなのだろう。そして受ける印象というのも、その時の感情や経験によって変化するものなのだろう。今回は前々日に十二湖の澄んだ水を見てしまい、紅葉という華やかで刹那的なドラマティックな光景を見てしまった後だけに、透明感のない五色沼の湖水がまがい物のように、色あせて見えるのも致し方なきところであろうか。

陽が落ちてから、磐梯山爆発博物館（って名前だったかな）に入る。明治の大爆発の様子モデルが、ボディソニック的振動を伴って見ることが出来る。パネルも結構勉強になった。今いる磐梯高原の下に、500人余りの遺体が埋まったまゝいるのだそうだ。

☆ 再び北陸道は夢の中

あとは、喜多方へ出て、一応、喜多方ラーメンを食べて（350円安い！）、新潟へ向かった。そして再び魔の夜間・北陸道に挑戦！なのである。

今回は無理をせずに、大積PAで35分、名立谷浜SAで10分、越中境PAで20分、小矢部川SAで2時間20分、尼御前SAで5分と、30分～1時間走っては小刻みに休憩を取る戦法で切り抜けた。それでも、やはり半分は居眠り運転だったようにも思える。

10月12日（水）

☆ 光は偉大だ

夜を徹して5時40分、賤ヶ岳SAに到着。食欲はなかったが、珍しく食堂が開いていたので、朝食を取る。ビーフカレー650円を頼むと、便所に行っている間に持ってきた。やたら早い。レトルトパックの食べたことのあるような味であった。おっさん、これ黒カレーとちゃうか。

6時、スタート。夜が明けてきた。周りの風景がじんわりと見えてくると、不思議なもので今までの眠気が、ほんとに嘘のように（変な表現だ）消え去った。頭の中にも光が差し込んで来たようである。これだけでも光というものは実に有難いものである。

今回の撮影旅行でも、ずいぶんと光に振り回されたようだ。一級の風景でも曇天で目立たなかったところ、陽が暮れて見えなかったところ、何でもない森に差し込んだ一条の光の美しさ。光を観ると書いて観光、影を撮ると書いて撮影、この6日間の私の所作は、光と、それが為す影とに、一喜一憂し、翻弄さ

れっぱなしの、みじめなものだったのかも知れない。

などと頭の中で考えているうちに、体のほうは、車を米原ジャンクションから名神高速に入れ、時速130kmでスッ飛ばしていた。

朝8時、福崎（少し精神分裂気味）とエス君、無事帰る。

==== 終わり ====

いやぁ、最後まで読み通された方、ごくろうさまでした。それがどないしてん！とお怒りになるような話もおおございましたね。大いに反省しております。それと、言い訳になりますが、締切まぎわの2日間で一気に書いたものなので、いろいろと不備もございませう。その折りは、御叱咤下さいませませ。

福崎かずたろう